

TOP > 論文・レポート > 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～ > 【一人一人の違いに寄り添うために】第11回 教育活動にデジタル端末を活用する真の意図

いいね! 4

ポスト

B!



論文・レポート

Essay · Report

【一人一人の違いに寄り添うために】第11回 教育活動にデジタル端末を活用する真の意図

著者： 蓑手 章吾 (HILLOCK 初等中等部 初代学院長)

掲載日： 2025年1月24日掲載

カテゴリー： 一人一人の違いに寄り添うために 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～

関連キーワード： インクルーシブ教育, 日本, 蓑手 章吾

ヒロックでは、日ごろから子どもたちもノートパソコンやタブレットなどのデジタル端末を活用しています。各家庭でご準備いただいた、自分専用の端末です。毎日家に持ち帰っている子どもいれば、自宅ではクラウドを活用し、スクールに置きっぱなしにしている子どももいます。

入学時にはタイピングができない子ども、1か月も触っていればスラスラできるようになってしまいます。「まずはローマ字を覚えてから…」なんて大人は考えてしまいがちですが、そんな順番は必要ありません。子どもの学びは「同時」に起こります。むしろ同時の方がいい。というのも、タイピングができることは、その子にとっての自由の拡張につながりやすいんですよね。タイピングができれば、好きなものをインターネットで調べられる。タイピングができれば、友達とメッセージでやりとりできる。タイピングができれば、なんかかっこいい。様々な「できるようになりたい！」という動機がそこにはあります。

他方、「ローマ字を書けるようになりたい！」という動機は、なかなかもたせにくいですよね。日常でローマ字を使う場面が想定しづらいし、英語ほどかっこよさも有用性もない。だから、タイピングの練習をしながら同時にローマ字も学んでしまった方が、ストレスなくスムーズに身につくというわけです。

これは何もタイピングに限った考え方ではありません。私たち大人は、よかれと思って「まずは基礎から」教えがちです。学校のカリキュラムなんてまさにその典型ですよ。確かに、子どもの平均的な学びやすさの観点からすると理にかなってはいるのですが、子どもたちが学習意欲をもって主体的に取り組めるかという点、かなり厳しい方法でもあります。どうしても、評価や競争やゲーム性などを取り入れざるを得なくなってくる。それが、「競争に勝つことが価値」「不正解は恥ずべきこと」などの誤ったメッセージとして伝わってしまっているでしょう。

スポーツやアートは、まず「やってみる」ことを大切にします。サッカーなら試合をやって、必要が出てくるからシュート練習をしたり、筋トレしたりするし、ピアノなら最初に弾きたい曲をやってみて、うまく弾くためにバイエルなどを練習していくでしょう。その動機は「試合でいいプレイをしたい」だったり「いつかあの曲を上手に弾きたい」だったりするわけです。そして、この観点で教科の学習をとらえ直そうとする手法の転換が、探究学習という考え方です。

話を戻します。ヒロックに見学に来られる方の中には、子どもたちが文房具の一種のようにデジタル端末を操っている光景に驚かれる方が少なくありません。「これからの時代を生き抜く

キーワード検索

Google 提供



Find us on **facebook**

インクルーシブ教育



社会情動的
スキル



遊び



メディア



発達障害とは？



CRN
アジア子ども学
研究ネットワーク



CRNAの研究活動

Research Activities at CRNA



所長ブログ
Director's Blog

ためには、必要なスキルですからね」とおっしゃる方もいます。確かにそうなのかもしれませんが。しかし、私たちヒロックの狙いはそこではないのです。

デジタル機器は今日、ビジネススキルという小さい範ちゅうには収まっています。日常の調べ物や娯楽、行政とのやりとり、買い物、友人とのコミュニケーションに至るまで、生活のほぼ全てに欠かせないものとなっているのではないのでしょうか。そして、この世界的な変化を私は好意的に受け止めています。これまでの歴史を見返すと、情報は特権階級のみに限られ、情報へのアクセスは階層や能力、地理的要因などによって埋めようのない格差がありました。それが今日、ほぼ全ての人が、自分にあった方法で情報の入手ややりとりをできる世の中になったのです。そんな文明の利器を、「子どもだから」という理由で一律に使わせないのは、子どもの権利の面からもいかなものかと思ってしまう。

「デジタルは危険だから」「子どもはスキルが低いから」という理由で遠ざける方もいます。それでは、大人は十分に使いこなすスキルがあると言えるのでしょうか。私たち大人も、デジタルを系統的に学んできている人はほとんどいないはず。失敗を繰り返しながら、経験を積み重ねることでそれなりに使えるようになっていないのでしょうか。そうであるなら、子どもたちにも学ぶ権利を与えるべきではないのでしょうか。

ヒロックが子どもたちに積極的にデジタル端末の使用を推奨する理由は、子どもたちの学びの選択肢が増えるからです。端末があれば文字を書くのが苦手なあの子ども、自分の意見を表明できるようになります。人前で話すことに抵抗があるあの子ども、テキストや絵や音声でコミュニケーションできるようになります。学習がゆっくりなあの子ども、膨大な教材の中から自分に最もあったものを選択し、ストレスなく学び続けることができるようになります。

10年後の社会や働き方なんて、誰にも分かりません。その頃でもタイピングは必須な能力かと問われると、自信をもって肯定できないし、デジタル端末を操る能力自体が必要なくなっている可能性だって十分にあり得ます。今現在、最新の社会をとらえることだけが、まだ見ぬ未来を占う唯一最善の方法でしょう。しかしそれは全て学びの副産物。そんな投資や目先の利益に頭を悩ますよりもまず、目の前の子たちの「学びたい」という動機を喚起し、「学んで楽しい！」の実感を保証する環境をつくること。そのためのデジタル環境をヒロックでは構築しているというわけです。

[<< 前の記事へ](#) | [次の記事へ >>](#)

筆者プロフィール



蓑手 章吾 (みのて・しょうご)

HILLOCK (ヒロック) 初等中等部 初代学院長。元公立小学校教員で、教員歴は14年。教鞭を持つ傍ら大学院にも通い、人間発達プログラムで修士修了。プログラミング教育で全国的に有名な前原小学校では、研究主任やICT主任を歴任。2022年4月、オルタナティブスクール・HILLOCK (ヒロック) 初等部を開校。著書に『子どもが自ら学び出す！自由進度学習のはじめかた』『個別最適な学びを実現するICTの使い方』（ともに学陽書房）、共著に『知的障害特別支援学校のICTを活用した授業づくり』（ジヤース教育新社）、『before&afterでわかる！研究主任の仕事アップデート』（明治図書出版）などがある。

関連キーワード：[インクルーシブ教育](#)、[日本](#)、[蓑手 章吾](#)

いいね！ 4

ポスト



この記事の関連記事

- ➡ [【一人一人の違いに寄り添うために】第3回 マンパワーに頼らず、テクノロジーの力を活かす](#)
- ➡ [特別支援教育における情報通信技術（ICT）の活用](#)

Dr. 榊原洋一の部屋

PAGE TOP

小林登文庫

Tweets by crn_jp

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購読しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

論文・レポート新着記事

- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ
- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- ➡ 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ（ベルリン）
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア

▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

